

2018年 日本基督教団八ヶ岳伝道所 主日礼拝 NO.1000
説教 「キリストの当事者になった」 山本 護 牧師
聖書 詩篇 46:2~4/マルコによる福音書 1:16~20

「海の水が騒ぎ、湧き返り、その高ぶるさまに山々が震える(詩編 46:4)。海は生命の源だが、自然は時折恐ろしい相貌を見せる。

海をよく知る漁師は、「板子(和舟の底)一枚下は地獄」と言い、海は死にも隣接している。だがどこにいても神が共におられるのだから(46:2)、「決して恐れない(46:3)」と。

「イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、シモンとシモンの兄弟アンデレが湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった(マルコ 1:16)。

淡水の湖だが原語は「thalassa=海」。激変する海の恐ろしさは、漁師出身の弟子はよく知っている(4:37~38)。通常、漁は安全な沿岸でしていた。

いつものように兄弟舟で漁をしていると、近くの岸辺をイエスがぶらぶら歩いている。するとイエスは、いきなり「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう(1:17)」と語りかけた。

「人間をとる漁師」とは何か。そんな謎めいた言葉は分かるまい。

「イエスについて行く」ためには、どんな覚悟が必要なのか。準備もせず、身内の了承も得ず、「二人はすぐに網を捨てて従った(1:18)」。

続いて「ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ(1:19)」にも声をかけ、「この二人も父ゼベダイを雇い人たちと一緒に舟に残してイエスの後について行った(1:20)。働き頭をまとめて奪われ、残された家族は困窮する。故郷でのイエスの評判が悪いのは(6:4)、こんなことに起因しているのかもしれない。

「人間をとる漁師(1:17)」とは不可解な言葉だ。隠喩として解すれば、「危険な沖(世)に漕ぎ出して人間をとる」というのか。

あたかも夜間に海を渡り(4:35)、イエスは居眠りしていても、弟子たちは嵐で混乱するほどに段差があるのか(4:38)。確かに私たちは、弟子のように揺れながら従って来た。

シモンとアンデレの兄弟は「すぐに網を捨てて従った(1:18)」。網は、高価な財産であり、労働に不可欠なものであり、家が受け継ぐ神聖な道具であった。彼らにはどれほどの葛藤、どれほどの逡巡があったか。福音書は何も語らず、ただ招きに応えた事実のみを伝えている。

イエスの呼びかけに応じることは、謎めいた跳躍。新たな見通しがあつてのジャンプではない。そこには何らかの断絶がある。呼びかけに応えることは、断絶と跳躍。

招きの言葉を受け取る者は、新たな命の冒険に踏み込む。

ヤコブとヨハネも同様、父や雇人たちの啞然とした顔が想像される(1:20)。若い漁師たちに、揃って求道心や悩みがあつたわけではない。傍から見れば一大決心だろうが、ただイエスに呼びかけられることで飛躍が起こった。私たちの信仰もこんな感じではなかったか。傍観者には分かるまいが。

イエスは弟子になる者の日常を「御覧になる(1:16)」。イエスの「まなざし」があつて、事が始まる。その時の日々が順境や逆境かは関係ない。私たちにも、まなざしが注がれ、呼びかけられ(1:17)、「はい」と応えてついて行った。

召しにふさわしいか否かなど、まったく意味がない。イエスが見つめ、呼びかけられ、ついて来た事実こそが重要。私たちはキリストの当事者として「迎え入れられた」。

キリストへの服従を妨げる要因は多い。だがイエスの言葉はすでに私たちの内にあつて、何かしら動かされている。私たちは、主の働きを眺める傍観者ではない。キリストの命が現れる当事者なのだ。



《おまけのひとこと》

うしろをふり返ると 幾人かの靴跡に混じって 裸足の跡がある ははあんイエスさんのものだな 裸足跡だけの所は背負われていたのだろう 靴跡だけの所はイエスさんを背負っていたらしい